三井楽

五島列島の最西端に位置する福江島の北西部分・三井楽の島は、8世紀から9世紀にかけて多くの遣唐使の最終経由地であった。三井楽から東シナ海を真西に渡るという危険な旅に出たが、生きて帰ってこられたのは半数程度だったという。冬になると海から吹き付ける強風のため、草深い半島の木々や草木はほとんど横に伸び、三井楽は荒涼とした容赦のない場所と感じられる。

この半島の厳しい気候と、日本列島の西端に位置し、遣唐使が故郷に別れを告げる場所であることから、世界の最果てを意味するこの地名が生まれた。10世紀の『かげろう日記』に収録された歌には、死後の世界とあの世の狭間である「みみらく」で、いつか亡き母に会えるようにと祈る作者の姿がある。